

平成24年度「県立学校復興交流推進事業」実施報告書

～（生徒会・部活動交流）～

[岩手県立杜陵高等学校定時制]

1 事業目的

他校との生徒会交流を通して、生徒会活動の活性化を図ると共に、被災地の高校との交流を通して、東日本大震災津波の被害や復興について考える機会とする。

本事業を「県立学校復興交流推進事業」の一環と位置づけ、東日本大震災津波をみつめ、地域の未来を担う「人づくり」を進めていくため、復興に係わった、学校間、地域間交流活動等を目的として実施・取り組みにあたる。

東日本大震災津波について、その記憶を風化させないために被災地を訪ね東日本大震災津波から1年余を経た現在の状況を直接知ることで、あるべき人との関係を考えさせ、「絆」の大切さを感じてもらう。この見聞の体験がこれからの社会の担い手としての自覚や、自分たちが生まれ育った地域社会の一員としての自覚を強くさせることを期待する。

また、他校生徒会との交流を通じ、情報交換や互いに支援する環境を作り、生徒会活動の活性化を図る。

2 活動内容

名称	実施日	活動場所	参加対象	参加人数
(1) 生徒会交流（県内）	8月20日（月）	宮城県東松島高等学校	生徒会執行部	10名

3 実践事例

(1) 生徒会交流（「生徒会交流・被災地訪問」 宮城県東松島高等学校）

東松島高等学校は、平成17年に開校した宮城県初の三部制・単位制高校で、全校生徒数284名と本校と同規模の高校であり、双方にとって共有できる点が多いと思われたので、本事業の趣旨を説明し相手校の同意が得られた。実施にあたり、生徒会交流だけではなく、震災から1年余りが経過した被災地の現状を見ることで、復興に対して「今できる事・すべき事」と「息の長い復興への取組」を考えさせたいことから、被災地の訪問も含めた計画を立案し実施した。

①事前準備

6月中旬より週一度月曜日に参加者のミーティングを持ち、訪問地の様子などについて事前学習し、準備を進めた。

②被災地見学

8月20日（月）朝学校を出発し松島海岸を經由して東松島市へ向かった。東松島高等学校で生徒会執行部6名・担当教諭と合流し、被災地視察・訪問を行った。はじめに東日本大震災津波で全壊した松島自然の家へ行った。現地では、東松島市職員の方々に当時の状況の話を交えながら施設内を案内していただいた。まず目についたのが以前松林であった海岸線一帯が何も無い状態で、施設周辺に高く積み重ねられた瓦礫の山だったことに生徒達も絶句した。入口は地盤沈下のため地面と離れた



地盤沈下により地面と離れた玄関



周辺は瓦礫置き場となっている

階段から室内へ。玄関ホールから向かいの部屋まで津波によりカベが突き抜けており、当時の被害の大きさと津波の恐怖を改めて感じた。二階のカベには津波が到達した印も残されていた。宿泊棟や体育館も同様に荒れ果てた当時の姿のまま残されており、生徒達は津波の恐怖だけではなく、威力の強さなどに驚嘆していた。二階では当時施設内で地震と津波に被災した職員から当時の状況や水が引くまでの様子を話していただいた。生徒達は真剣にメモを取りながら職員の口から語られる当時の様子に耳を傾けていた。



津波により手すりの取れた階段



津波により時を止めた時計



津波に破壊された体育館

次に市職員の先導で月浜海岸に向かった。この時期多くの海水浴客で一杯となるはずの海岸であった。津波により防波堤が壊れている事、家を失った人達がその地域を離れずに仮設住宅で生活を続けていることなど話を聞きながら周辺を視察した。



月浜海岸の仮設住宅

③生徒の感想文

・東松島市は、一步踏み出せばそこには津波の爪痕が見て取れます。私はその部分でも、少し震災に対する心の思いの差があるのではないかと考えさせられました。周囲は地盤沈下のため、地域一帯水につかっており、復興には時間がかかることを聞き、私たちに何ができるのか?と思いました。(Mさん)

・震災体験者の人からは、「松島海岸には、何万本の松の木が植えられていたが、津波によって全部流されてしまった。松島自然の家も二階まで津波がやってきて避難者は、不安や恐怖を抱えていた。」と聞き、震災当日の恐ろしさを理解しました。現状を見て当時の状況を想像するのは難しかったのですが、「自分は、被災したことを受け入れるのは決して容易ではないけれど、現実を受け入れるようにしていかなければいけない。」と思いました。(Fさん)



地盤沈下により水没した地域(高台より撮影)

テレビなど映像で見ていた惨状を目の当たりにした率直な気持ちをつづる生徒もいた。

④生徒会交流

被災地視察を終えて、その後東松島高等学校へと戻り生徒会交流を行った。交流に先立ち、校舎内の施設紹介と東松島高等学校の特徴について生徒会執行部から説明を受けた。

創立7年目であり施設もきれいで充実している中、特に生徒たちの注意を引いた施設が食堂兼ミーティングルーム・美術室・学習室であった。三部制であることから夕食時に生徒へ食事を提供する大事な施設であると共に、単位制のためHR教室が無く生徒の居場所の一つとしての機能を併せ持つ施設であり、多くの生徒が食事以外の目的でも利用している。本校でも集団の中に溶け込めない生徒もいるが、このようなスペースの確保が困難であり、今後の課題でもあると感じた。美術室には大きな焼き窯を備えており、陶芸の授業もしていることには本校生徒たちも大いに興味がわいたようであった。その後教室や情報処理

室などの施設を紹介された後に、自学学習室に案内された。そこ、では、生徒たちが集中しやすいよう仕切りと電気スタンド付きの机が約30席ほどあり、生徒たちの利用状況も良好であるとのことであった。多部制の欠点として生徒への連絡が難しく、SHRは週に3回と少ない。連絡手段として本校でも用いているテレビモニターを利用したインフォメーションを活用しているが、その他に生徒個々に連絡するために職員室前にパーソナルボックスという生徒個人用の棚を設けていた。近くに自衛隊基地があることから各教室は防音となっており、夏場は騒音等で窓を開けることが難しいため各教室にはエアコンが完備されていた。

一通りの設備を見学した後、東松島高等学校生徒会執行部と意見交流を行った。東松島高等学校の生徒会役員は20名程おり、生徒会役員の数の多さに少々戸惑いを感じながら交流が始まった。生徒会組織の説明の中で、生徒会長と副会長は役員選挙により選出されているが、その他は庶務として自ら生徒会組織に自薦で活動しており、募集は随時、人数制限なしとのことであった。生徒会交流はフリートーカー方式で行った。その中で「生徒会活動の現状・課題」「復興への取り組み・課題」の二つを柱に双方の生徒たちが意見交換を行った。



陶芸用の窯がある美術室



個人連絡用のパーソナルボックス



自学学習室の様子

⑤生徒の感想文

・学校の実状を踏まえ、自ら考え行事等を運営している。生徒総会などが出来ない代わりに、生徒たちの意見を多く聞き入れやすい大委員会を中心に、少しでも多くの意見を反映するための組織形態であると感じました。(Yさん)

・交流会が進むにつれて、東松島高校の生徒会活動の熱心な態度や、様々な工夫を凝らしているのが目に見えて、私たちももっと時間を掛けて生徒会内で話し合いをしたり、生徒の皆さんの意見を反映させたりして、生徒会活動の中身を濃いものにし、次期生徒会に引き継いでいきたいと思います。(Kさん)

・復興への取り組み・課題について意見交換していく中で、「東日本大震災によって色々なことを考えさせられた。…(中略)…今すぐに取り組める事柄に冷静かつ沈着な対応をしていかなければならない。」などの考えを持つことが大切だと思いました。また、「東松島高校の生徒さんたちは、実際に震災を経験しているのだから、同じ高校生という立場での姿勢や行動で表現しなければ生徒会交流が無駄になってしまう。無駄にならないよう共に、震災復興に向けて頑張ろう。」という思いを共有した気がします。(Fさん)



交流に先立ち行われた歓迎会



意見交換会の様子



全員で記念撮影

本校生徒会執行部の生徒たちにとって、本事業による他県交流は今後の本校生徒会活動にとって有益であった。また、これまで漠然として現実味の伴わない、復興への取り組み方について具体性のある考え方が出来たことは、今後の復興に必ず関わる人材としての第一歩を歩み出せたと感じている。

4 成果と課題

(1) 成果

本事業を実施するにあたり、東日本大震災津波による被災地の現状と復興について考える事前学習の時間を持った。その中で生徒たちから出てくる意見は、具体性の乏しい理想論が多かった。実際に本校では被災体験者が少数のため（被災による転入が若干名）、当日の地震の恐怖はあるが、その後の生活についてはあまり不便を感じることなく生活できていた。今後確実に復興を担う人材となっていく生徒たちに、映像でしか知ることが出来ないでいた現状をしっかりと捉えながら共感を持ち、その時々に必要な支援を考える機会と共に、命の大切さ、人間としての生き方などを感じ取り、地域社会に還元していくことができる人材に育って欲しいと望み実施した。本交流会等を通じて、「今回の交流会に参加して、被災した同じ県として色々な意見や課題を話し合えたことによって、今後震災復興に役立つ為に自分たちが日頃の学校生活で取り組めること。東日本大震災津波の記憶を風化させず、後世に震災のことを語り継ぐ。など、自分自身を成長させる良い経験になった。（Fさん）」と、生徒の感想にも見られるなど、そのねらいと目的は理解されたものと思われる。

(2) 課題

「復興」「支援」という言葉を耳にして生徒たちが口々に語ることの多くは理想的な考えが多く、現実的に高校生として出来る事へと発想が及ばなかった。また、被災地では生活基盤やインフラ整備が進んでいない。その中で、杜陵高校生として何が出来るのかを自分たちの見聞を深め、考えることが出来たことは、本事業での成果であったと考える。その反面、復興を支える人材の育成を図ることについて、本校として何をすべきか、今後どのように取り組みを継続させ深めていくのかなどの具体的な計画がまだ出ていない。定時制・単位制高校という学年の枠を超えた活動が可能であることを生かした、独自性の共通認識を学校全体の計画として全職員・全生徒で持ちながら取り組んでいきたい。

5 まとめ

実際に被災地を目にして、改めて被災地の現状を感じる事が出来た。また、東松島高等学校の生徒たちの話を聞いた中で、今被災地が本当に必要としている生活基盤やインフラ整備、息の長い中長期的な人的支援と、全国から支援物資等で送られる物的支援のギャップが大きいという話がでた。量的な支援がほぼ充足している中で、高校生として中長期的に支援していくためにも今後も形を変えていながら交流を継続していくことで双方の生徒たちで意見がまとまった。今後の復興を担う人材である生徒たちにとって有意義な事業であった。

本校に入学する生徒たちの多くは、個々に何かしらの問題を抱えている生徒が多い中、全校一斉の活動は困難であるが、無学年単位制高校としての本校の教育目標の「自他の人格を敬愛し、心身ともに健全な人間の育成」に通じる精神が見出せる。

今後、ボランティア活動や、「総合的な学習の時間」を活用し、被災地の人々との共感的な理解を図りながら交流を継続させ、支援のギャップなどについて情報を収集し、具体的な活動へとつなげていきたい。

～花南復興教育2012～

岩手県立花巻南高等学校

1 目的

「現場を見せて考えさせる」

復興教育のスタートにあたり、被災地に足を運び、現場の状況に直接触れることにより、以後の取り組みや行動を主体的に考える契機とする。

2 活動内容

名 称	実施日	活動場所	参加対象	参加人数
(1)被災地見学	7月24日(火)	県内沿岸部 ・陸前高田市 ・大船渡市 ・釜石市、大槌町 ・山田町 ・宮古市	1年1組 1年2組 1年3組 1年4組、生徒会リーダー 1年5組	41名 40名 42名 37名、6名 40名
(2)総合学習での被災地訪問 事前・事後学習	6月28日(木) 7月18日(水) 8月22日(水) 8月29日(水)	本校	1学年全員	200名
(3)生徒会リーダー会や生徒総会等での協議	7月24日(火)	山田高校	生徒会リーダー	6名
(4)文化祭での発表・協議	8月31日(金) 9月1日(土)	本校	1学年全員 生徒会リーダー	200名 6名

3 実践事例

(1)被災地見学

夏季休業初日に、1学年および生徒会リーダーが、クラス毎に正副担任の引率の下、貸切バス5台で上記5カ所の被災地を訪問した。現地では、観光物産協会を通じて依頼した被災地ガイドからの説明を聞いたり、写真を撮影し映像として記録したりして、被災地の現況把握を行った。また、1年4組の生徒は、山田町関谷・関口地区の仮設住宅居住者にインタビュー等を行うなど交流を図った。上記5カ所の主な見学地は以下のとおりである。

陸前高田市：一本松、旧市役所、高田高校、気仙大工左官伝承館（3.11 希望の灯り）

大船渡市：赤崎中学校、時計台、屋台村（仮設商店街）

釜石市、大槌町：釜石駅前仮設商店街、鶴住居地区防災センター、旧大槌町役場

山田町：山田町役場、大沢地区、田の浜地区、山田高校（生徒会の交流）

宮古市：田老観光ホテル（震災時のDVD視聴）、防潮堤

震災から1年4か月後の訪問であったが、約8割の生徒が、震災後、初めて実際に被災地を訪れた。新聞やテレビ等では知ることができない震災時の様子を被災地ガイドから直接聞くことができた。

また、依然として進まぬ復興の現状を目の当たりにしたことで、これまで以上に被災地支援が急務であることを実感したようである。

以下は、生徒達の感想である。(生徒会誌より一部抜粋)

四階まであった陸前高田市役所は全て波にのまれてしまい全壊していた。津波の犠牲となった多くの職員へ手向けられた花束を見たときにとても心が苦しかった。よくテレビなどで「頑張って下さい」とコメントしている人がいるが、被災地の人たちは精一杯頑張って復興させようとしている。本当に頑張るべきなのは、私たちなのではないかと思う。「頑張って下さい」ではなく手伝わなくてはいけないと思う。実際に行動して、支えていかなければいけないと思う。(1組男子)



大船渡では、津波に流された学校を見てきました。海の近くにある学校ということもあって1階部分は全て水に浸り、机などは教室に散乱したままでした。すぐ隣には大量のがれきが積み上げられていました。この学校の生徒は、いつか母校に帰ってこられるのかを考えると少し悲しく思いました。今回の被災地見学で見たこと、聞いたことは忘れずにいようと思います。そして親や友人に伝えたいです。これからは自分に出来ることから被災地の復興に役立っていきたいです。(2組女子)

被災地見学を通して釜石、大槌はまだまだ復興が進んでいないと思った。だが、どちらの地域も震災のことをマイナスに捉えるだけでなく前向きに再スタートを切ろうとする強い意志がガイドさんから伝わってきた。見学を通して学んだことをしっかり自分の中で整理し、今後沿岸の人が元の生活に戻れるように自分たちができることを考えて実行することが大事だと思った。(3組男子)



仮設住宅訪問で一番印象に残っていることは「瓦礫の撤去」について聞いたときに、「思い出したくない」と言われたことです。震災から1年以上たった今でも、「あの時」に負った傷はまだ癒えたわけではないことを教えられたようでした。この山田町の見学を通し、普段の生活を当たり前で過ごすのではなく一日一日を大切に過ごしていかなければならないと思いました。(4組女子)

田老の人たちは一生懸命復興作業に取り組んでいました。自分の大切な人、身近な人を失った人が沢山いるにもかかわらずがんばっている姿を見て、自分にもなにか出来ることはないかと考えるようになりました。そして、考えるだけではなく行動にも移せるようになりたいと思います。(5組女子)

(2)総合学習での被災地訪問事前・事後学習

総合的な学習の時間の一環として、6月28日と7月18日に事前学習を行った。6月28日は、クラス毎に活動し、H.R.担任から今回の復興交流推進事業の目的およびその第一段階として被災地を訪問し、現地の状況を把握することで学年全体として共通理解を図り、今後の取り組みに繋げていく方向性であることを説明した。その後、1クラスを6～7人からなる6つの班に分け、被災地

訪問およびレポート発表に向けての係分担を行った。7月18日は、学年全体での活動として、本校副校長による講話を行った。内容は、復興に向けての基本的コンセプトが、①現場を「見る」(被災地訪問)、②「感じる・考える」、③「行動する」(文化祭での発表、生徒会誌への寄稿)であることを確認し、その後、前任校山田高校の震災当時の様子を写真等を紹介しながら説明するものであった。また、被災地訪問時における注意事項や非常時への備えについても説明を頂いた。

8月22日、29日は事後学習として、文化祭でのレポート展示に向けて、班ごとに見学先の様子や感想を模造紙にまとめた。どの班も被災地や復興に対する思いを自分達の言葉で書き表すことができていた。

(3) 生徒会リーダー会や生徒総会等での協議

被災地訪問時に山田高校を訪問し、約50分間にわたり、両校の生徒会リーダーが意見交換や質問等を行った。その交流を通じて、震災当時の様子や震災時に困ったことなどを聞くことができた。また、内陸に住む者に対して望むこととして、テレビだけでは伝わらない被災地の現状を実際に見に来て欲しいという意見があり、今回の活動の意義を改めて実感していた。



今年度、本校生徒会は、「はなまきUC」の活動の一環として、遠野市で沿岸部の小学生との交流を2回実施しており、今回の訪問と併せて、小中高生とのさらなる交流の輪が広がることに期待を寄せていた。

(4) 文化祭での発表・協議

8月31日と9月1日に行われた本校文化祭において、1学年展示として事後学習で作成したレポートの展示発表を行った。1つの教室を展示会場とし、各クラスの文化祭実行委員が会場設営・撤去、パネルへのレポート掲示を行った。一般来場者を中心に関心を持って見学していただいた。保護者や地域住民に対して被災地の様子を伝えるとともに、本校の復興教育への取り組みを紹介できる機会となった。



4 成果と課題

(1) 成果

報道等においては、年月の経過とともに大震災の風化が懸念されているが、本校生徒においては、実際に被災地を訪問し自分の目で現状を把握してきたことで、被災地に対する思いや復興への願いが薄れることなく、10年後、20年後の日本を築き上げていく人材としての意識を高めることができた。また、生徒会リーダーが今回の取り組みに参加したことで、来年度以降の全校生徒による復興教育の基礎を築くことができ、本校の長期的な活動として今後計画することができる。

(2) 課題

今年度の取り組みは、事業を計画するにあたっての検討に要する時間のゆとりがなく、活動のほとんどが教員からの提示となってしまう、生徒達がアイデアを出したり、話し合ったりする機会を与えられなかった。

5 まとめ

今年度の復興教育の核となった「被災地見学」は、被災地の現状を把握し、同じ県内に住む者として被災地を再生していかなければならないという使命感を抱かせるには十分な企画であったと思われる。それは生徒のみならず教員にとっても同じことであり、学校（学年）全体として復興支援の必要性の認識を共有することができたことは大きな意味があった。

来年度以降は、生徒会と協力し、生徒達のアイデアを取り入れながら、生徒達が主体的に取り組むような本校独自の復興教育を推進していきたい。

平成24年度「県立学校復興交流推進事業」実施報告書
～復興支援活動 これからの岩手を担う人材の育成～

[花北青雲高等学校]

1 目的

総合生活科の学校設定科目「生活産業経営実践」における社会に貢献する人材の育成に資すること。

2 活動内容

名 称	実施日	活動場所	参加対象	参加人数
(1)被災地視察	6月22日（金）	大槌町内	総合生活科3年	36名
(2)商品開発	7月～11月	花北青雲高校	総合生活科3年	36名
(3)被災地支援交流	12月4日（火）	大槌町内	総合生活科3年	36名
(4)大槌高校生との交流	12月16日（日）	大槌高校	総合生活科3年	8名

3 実践事例

家庭の専門学科である総合生活科は、コミュニケーション能力を伸ばしながら、衣食住や保育、高齢者の看護や介護などを専門的に学び、地域に貢献する人材の育成を推進している。特に3年生で履修する、学校設定科目『生活産業経営実践』は、1年生で学習した「生活産業基礎」を発展させ、社会の経済活動を担う一員として相応しい考え方や態度を養い、広い視野に基づいて、考える力や意志決定能力、他人と違う意見を持つ勇氣、地域と連携し、地域食材を活かした商品開発を行うなど、生徒が主体となり、実践的に学習している。昨年度は、地元花巻産の雑穀を使用した焼き菓子「雑穀ブッセ」を開発し、文化祭で販売し、その売上げを被災地の大槌高校とユニセフに寄付するという取り組みを行った。それらは生徒たちから自発的に出された願いを実現させたもので、大槌高校の生徒やユニセフの方々を招いて話を伺うなど学びの幅が広がった。それらを後輩にも引き継ぎたいということで伝達会を開催した。今年度は被災地の支援について、人々との交流という形で実現させようと考えた。生徒たちは、同じ県民であるにも関わらず、今までその機会がなかなかないことに、後ろめたい思いを持っており、「是非やりたい！」との声上がり、今年度の授業の柱とした。



写真1:昨年度のユニセフ講座



写真2:大槌高校生を招いて(H23)

(1)被災地視察

まず、被災地の現状をこの目で見ることから始めた。6月22日、大槌町の一般社団法人「おらが大槌夢広場」の臼沢和行さんに依頼し、被災地を視察した。大槌町は津波とその後の火災で壊滅的な被害を受けた町である。被災前の美しい町並みの写真を見ながら説明を受け、この場所が町民にとってどんな場所だったか思いを馳せた。現地へ足を運び、自分の目で見ることがどんなに大切かを痛感した。視察で案内をしてくれた高田由貴子さんも被災者である。今、切望することは、被災地を忘れないでほしい、ということだった。賑やかだった町がなくなり、瓦礫があちこちに積まれた状況の町内で聞く体験は身につまされた。神戸大学の大学院生が、震災前の大槌町を再現しワークショップを行ったという話を聞いた。復興のためにも消えてしまった以前の町並みを再現する

ことは意義あることを知る。昼食は復興食堂でいただき、こんな状況でも力強く前に進もうと努力している方々の話を聴き、私たちもその復興に関わっていききたいと思いを再確認した。



写真3:被災地視察の様子

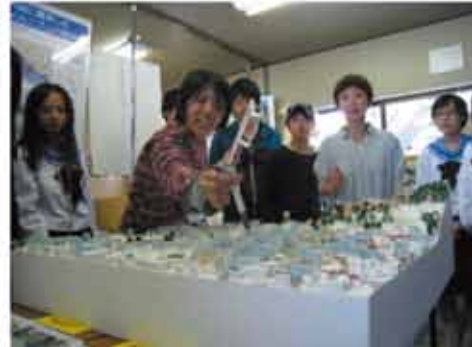


写真4:神戸大学院生の活動について

(2)商品開発

その後、高校生である自分たちができる復興支援について何度も話し合った。被災地である大槌の町を活性化するにはどうしたらよいか。いろいろな案が出されたが、その中で、大槌の特産物と、私たちの住む花巻市の特産物をコラボした商品の開発という案が出た。試行錯誤の結果、三陸産のわかめと、花巻の特産物である雑穀や米粉を組み合わせた商品『わかめと雑穀のケーキとクッキー』を開発した。また、これまでの学習で訪問した地元の食品製造会社（黒川食品）の豆乳を加えるなど、総合生活科のこれまでの学びのまとめとしての要素も加えた。開発にあたり、大槌町の復興食堂の方々にも試食していただき、意見をいただいた。

開発商品は本校の文化祭で販売し、その売上金をもとに、12月に行う支援交流の計画を立てた。



写真5:復興支援について話し合い



写真6:復興食堂の方に試食をお願い

(3)被災地支援交流

交流内容は、「被災地の子ども達や仮設住宅で暮らしている方々を笑顔で元気に！」というテーマに決め、準備を行った。どうしたら子どもたちが楽しんでくれるか、仮設住宅で暮らしている方々が喜んでくれるか、何度も話し合い、準備をした。

12月4日。午前中は、仮設の園舎である大槌保育園、津波の被害を受けたがその後再建できたおさなご幼稚園、そして養殖漁業を営む傍ら、規格外のわかめや茎を加工し、商品を作っているマリンマザーズ吉里吉里の3か所に分かれて活動を行った。

大槌保育園は津波で流され、2011年6月に日本ユニセフ協会の支援を受け建てられたプレハブの園舎で保育活動をしている。当日は大荒れの天気で、園舎が浸水するのではないかとというくらいの大雨だったが、子ども達は元気にそして温かく私たちを受け入れてくれ、交流会を行うことができた。園児と一緒にクリスマスツリーを製作したり、エプロンシアターや紙芝居の読み聞かせなどの活動を通しながら、触れあうことができた。



写真7:園児たちとクリスマスツリーの製作

マリンマザーズ吉里吉里では、わかめかりんとうの製造過程を見学した。わかめかりんとうは、地元で子どものおやつとして手作りしていたかりんとうをベースに、刻んだわかめを混ぜてはどうだろう！という地元の方々のアイデアから生まれた商品だということだった。生徒が開発した商品は、このわかめかりんとうをヒントにしたものであり、そのことも伝えた。

午後は、安渡公民館で館長さんから大槌町を襲った津波の映像を見せてもらい、お話を伺った。「自然災害は誰でもどこでも起こりうる。今回の災害を自分に置き換えて考え、行動できる人になって欲しい。」という言葉真剣に受け止めていた。その後、住民の方々に生徒が手作りしたお正月飾りを手渡ししながら交流した。握手をしながら、その手の温かさ、言葉の優しさが心に触れ、思わず涙が溢れた生徒もいた。

この交流を行うための経費、折り紙などの文具代や、お正月飾りを作る材料代、また、開発した商品をつくる材料代は文化祭での売上金を充てた。

(4)大槌高生との交流

今まで支援交流を行うために全面的に協力していただいた一般社団法人「おらが大槌夢広場」の臼沢和行さんから、大槌高校生との料理交流会の企画の話があり、希望者8名と参加した。自己紹介後、両校の生徒で混合班を作り、“地域食材をいかしたオリジナルの鍋料理”をテーマに食材購入のため地元商店に出向いた。各班とも、話し合いをしながら、新鮮な魚介類を中心に購入し、大槌高校に戻り調理を行った。その後、お互いに試食しながら交流を深めた。大槌高校生の中には、昨年度家庭クラブ員として本校に来て、被災当時の様子を話してくれた生徒もいた。現在は大槌町の子ども議会のメンバーとして活躍している生徒たちだった。同じ3年生ということで、偶然にも進学先が同じ生徒もおり、これからも交流していきたいとの思いを強めたようである。



写真9: どんな鍋にしようか相談



写真10: また逢えることを願って(大槌高校生と)

4 成果と課題

(1)成果

今年度の活動である被災地域の方々との交流を通じて、将来にわたって地域社会の再生に積極的に貢献しようとする意識付けができたのではないかとと思われる。

この活動の成果として、生徒の感想の一部を紹介する。

今回、生活産業経営実践という授業を通して、本当に多くのことを学びました。まず、前向きに頑張ることの素晴らしさです。私たち内陸の住民が、もし天災で今回の様な被害にあったらどのような状態になるでしょう。沿岸の人たちは先人から、多くのことを語り継がれてきたと思います。そのことも活かされているのではないかと思います。沿岸の人たちの前向きさには、本当に毎回驚かされました。前向きに考えるのにも勇気が必要だし、それを行動に移すにはもっと沢山の勇気や決断が必

要だと思えます。決断を下すとともに責任も背負うこととなります。被害を受けて落ち込み、傷ついた精神状態の中で、それだけのものを背負う覚悟があって、物事を進めていて・・・本当に自分の小ささを知りました。それとともに、私という一人の人間が被災地の方々のために、どれだけのことができるだろうと考えさせられました。私たちは、これからの未来を担う若者であり、多くの可能性を秘めています。私たちの努力次第で、今回被災に遭った地域、その住民の心までも変えていけるのではないかと思います。・・・(途中省略)・・・私がこれから社会という大きな集団の中に入り、生活していくうえで、どれだけ地元の力になれるだろうと考えたとき、その責任の大きさに気づかされました。私は、被災地に足を運び、多くの人と沢山の思い出をつくっていきたいです。多くの楽しい思い出が、これからの励みになるように・・・そうして繋がり、助け合うことの大切さを多くの人に語り継ぐことが私にできることだと思えます。

もし私が5年後、理学療法士になるという夢を叶えられたら、その仕事を通して、相手の心に寄り添うことで社会貢献しようと思えます。人はそれぞれ心にいろんな思いを持っているし、その置かれている現状も違います。相手と同じ目線に立ち相手を知ろうとする心、その心に寄り添い理解しようとする心。私は今回の実践を通して、このことを忘れてはいけないと思えました。

3月10日にこの地震が起きたとき、私の兄は沿岸にいました。地震直後は連絡をとることができましたが、津波がきた直後から連絡が取れなくなってしまいました。電気も通らず、携帯も通じない中でとても不安な時間を過ごしました。兄の安否が分からない時間が続いたので、警察に行き、捜索願も出しました。幸い、すぐに兄の生存がわかり、次の日には兄から直接メールが届きました。内陸にいる私でもこんなに不安な時間を過ごしたのに、被災地にいる方はどれだけ不安な時間を過ごしたのだろうと考えると、とても計り知れない苦しみだと思えました。

このような辛い状況におかれた岩手県も10年後には復興しなければいけないといわれています。10年で岩手県がどう復興していくかは、私たちのような若い世代の力が大いに必要になると思えます。

私は、被災地訪問を通して、お金や物を送ることよりも被災地へ足を運び、被災地の方々と関わり、少しでも笑顔になってもらえるような活動をすることが何よりも大切なのではないかと気がつきました。そばで話を聞いたり、話したり、被災地の方に寄り添うことが大切だと思えます。

私は、4月から岩手県職員として社会に出て働きます。この仕事は、地元である岩手県の皆さんの生活を支えるために先頭に立って仕事ができる素晴らしい仕事だと思えます。私は、岩手県職員として、被災した岩手県が1日でも早く復興できるように、生まれ変わるように一生懸命働き、社会に貢献していきたいです。これからの岩手県の未来が明るく希望あるものになるように1日1日大切に過ごしていきたいです。

(2) 課題

内陸部から沿岸部への移動には、バスで約2～3時間かかり、日帰りで交流を行う場合は時間が限られてしまう。そのため、2～3回訪問するとなると、交通費の捻出が課題である。

5 まとめ

昨年度の3年生から伝えられたように、今年度の活動を来年度につなげるために3年生から後輩への伝達会を開催する予定である。今年度新たに生まれた多くの絆を、これからも繋いでいけるよう、その思いを伝えることも大切な使命である。

震災からの復興には、まだまだ多くの時間がかかるであろう。これからの地域を創りあげていく人材としての高校生の力は重要であり、その育成を継続していきたいと考える。この活動を通して、人とのつながりを重視する総合生活科として、学びの本質が実現できたようにも思う。家庭の専門学科に学ぶ生徒として身につけた様々な技術を交流に役立てることは、まさに地域に貢献する人材の育成につながっている。自分は社会の一員であり、働くことで地域貢献していくことを生徒が認識できるよう、今後も生徒ともに取り組んでいきたい。

平成24年度「県立学校復興交流推進事業」実施報告書
 ～将来の岩手を担う人材を育成し、地域で支え合う力を育む復興交流推進事業～

岩手県立盛岡視覚支援学校

1 事業目的

被災校との交流や、被災地におけるボランティア活動、被災地支援のための物品製作及び販売等の体験をする。そのことにより、被災地の厳しい現状を感じ取り、障がいがある自分たちのできる復興支援を考え、進んで実行する態度を育む。また、被災県民として継続して支援をしていこうとする気持ちを育てる。

2 活動内容

名 称	実施日	活動場所	参加対象	参加人数
(1) 被災地の学校と交流しよう（小学部）	7月19日（木）	釜石市立釜石小学校	小学部全員	釜石小学校児童34名 本校児童 8名
(2) 災害について考えよう（中学部）	6月 4日（月） 12月19日（水）	校内 県立総合防災センター	中学部全員	本校生徒 7名
(3) 被災地に義援金を贈ろう（中学部）	6月20日（水） ～22日（金）	校内	中学部全員	本校生徒 7名
(4) 被災地でボランティア活動しよう（高等部）	9月11日（火） ～12日（水）	宮古市内4か所の仮設住宅（河南、荷竹、第二中、愛宕）	普通科全員	本校生徒 7名 仮設住宅住民のべ74名
(5) 被災地に義援金を贈ろう（高等部）	5月8日（火） ～10月7日（日）	校内	普通科2・3年2組	本校生徒 2名
(6) 被災地に義援金を贈ろう（寄宿舎）	7月14日（土）	寄宿舎内	在舎生全員	本校児童生徒 27名

3 実践事例

(1) 被災地の学校と交流しよう（小学部の活動）

① ねらい

例年実施している1泊2日の宿泊体験学習の機会に、被災した小学校との交流学习を通して被災地の現状を感じ取り、自分たちにできる復興支援をしていこうとする気持ちを育てる。

② 期日及び時間

平成24年7月19日（木） 13:20～14:30

③ 交流校

釜石市立釜石小学校

④ 対象

本校 通常学級 小1 2名、小2 1名、小4 1名 計4名

特別学級 小1 1名、小2 1名、小3 1名、小4 1名 計4名

釜石小学校 小4 26名

特別支援学級 たんぽぽ・ひまわり学級 8名

⑤ 事前学習

○5月18日（金）

プランターにひまわりとコスモスの種を蒔き、7月の交流で育てた苗をプレゼントする準備をした。

【種まき】



【大きく育ちますように】



○7月4日(水) 「3.11東日本大震災について知ろう」

全員で、「3.11東日本大震災」のDVDを見き聴きし、当時釜石祥雲支援学校に勤務していた先生の体験談を聞いた。この時、この交流学习のキーワードを「ともだち交流」と決めて取り組むことにした。みんな、真剣に映像を見たり聴いたり、先生の話に聴き入っていた。

【DVD視聴】



【キーワードは『ともだち交流』】



【被災した先生の体験談】

○7月5日(木) 授業を通して自分たちが感じたことを絵や文章にする。

【小1女子】なみがおそって、まちがぐちゃぐちゃになることがわかりました。いえやひとがながされてかわいそうだとおもいました。(数個の家と、真っ黒い波を描いた。)

【小2男子】こわかったです。じしん。つなみ。おうちやくるまやひとがながされた。つなみがきたと、おじいちゃんがいった。ふねがゆれた。こわかったです。

○7月9日(月)～11日(水) 自分たちができることに取り組んだ。

- 通常学級…ア 沿岸の人の今の暮らしを知る。
- イ 釜石小学校の子ども達の気持ちを考える。
- ウ 聞きたいこと、見たいことを整理する。
- 特別学級…ア ともだち交流で渡すメッセージを作る。
- イ 交流で披露する歌の練習をする。

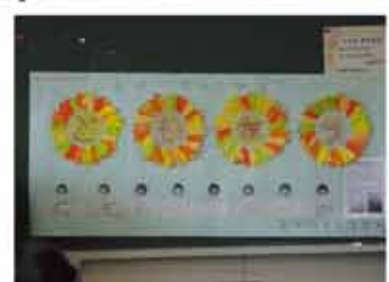
【新聞で調べた】



【歌と踊りの練習】



【ひまわりの花びらを折る】



【ともだちメッセージ】

⑥ 交流当日

○7月19日(木)

ア 全体

本校は、5月18日に種を蒔いて育てたコスモスとひまわりのプランター4個と、学級毎に折って作ったひまわりの「もだちメッセージ」を贈った。釜石小学校は、井上ひさし作詞の校歌で本校を歓迎してくれた。この後、通常学級と特別学級とに分かれてともだち交流をした。 【苗を贈る】



イ 通常学級

全員による自己紹介後、本校児童は震災について事前学習したことについて、自分たちが感じたことを話し、質問をした。釜石小学校の児童は自分たちの震災体験を話した後、質問に答えるという交流をした。体験談の時に、「前はつらかったけれど、今は家族や友だちがいるから楽しい。」と、どの児童も繰り返していた。この言葉に、本校4名は、今は元気で学校生活を送っていることを確認できて安心した。

【釜石小学校体験談 4年男子】

3月11日につながりが来てぼくが最初に思ったことは、家族にちゃんと会えるかなということです。なぜなら、家族が大事だからです。なぜ大事かというと家族がいないと淋しいからです。津波が来て二人のおばあちゃんの家は全壊しちゃったけど、家族が無事でよかったです。

避難所生活は、みんなにやさしくしてもらったり、遊んでもらったりしてうれしかったです。そして今、二人のおばあちゃんはそれぞれの仮設住宅で暮らしています。この震災で感じることはいろいろあったけど、楽しく学校に通えて良かったです。

本校4年児童が「僕たちにできることは何ですか？」と聞くと、「こうして来てくれることがうれしい」と言ってもらえたことは大きな収穫であった。おわりに、本校4年児童が「手紙を書きます。」と、感謝を述べた。

ウ 特別学級

自己紹介後、本校は、歌「ひょっこりひょうたん島」を披露し、その後、フルーツバスケットゲームをして交流した。釜石小学校からは、コースターと収穫したじゃがいもをおみやげにいただいた。本校の歌や踊りの時に、釜石小学校の児童は自然に歌を口ずさみ、一緒に踊った。元気な姿を見てもらい、「一緒に楽しむことが訪問した自分たちの役割である」という気持ちを十分感じる事ができたのではないかと思う。

【みんなでひょっこりひょうたん島を踊る】



【釜石小学校のみんなと一緒に】



⑦ 事後学習

○7月23日(月)～25日(水) 学級毎に、わかったこと感じたことをまとめ報告会の準備をした。

○7月26日(木)授業参観で保護者に踊りや絵、作文、ビデオ等で「ともだち交流」報告会をした。

【踊りを披露】



【ビデオ視聴】



⑧ まとめ

この学習を進めるにあたっては、子ども達の発達段階に合わせて内容を選びながら行った。子ども達は、津波で被害にあった釜石小学校の友だちに、自分たちにできることは何かと考え続けて学習してきた。そして当日はプランターで苗を育ててプレゼントしたり、元気な歌や踊りを披露したり、津波経験の話を聞いて、3.11の大震災の悲惨さを学んだ。

津波体験を聞いたり、歌やゲームでふれあったり、被災した町並みや仮設住宅を近くで見て、震災を肌で感じる事ができた。視覚障がい児童にとって、体験を伴う学習は強く記憶に残り、とても効果的であったと考える。事前から当日、そして事後までの一連の子ども達の一生懸命な取組の様子を見て、この「ともだち交流」のねらいは十分達成できたと感じた。子ども達の心に、困っている人に対して何かしようという思いやりの気持ちがしっかり育っていることが実感できた。この気持ちを大切に育てていくことが、復興教育だと考える。

7月19日には、じっさいにたいけんした話を聞かせてくれてありがとうございました。こわい思いをしたことや、かせつじゅうたくでたいへんなことがあると知りました。ぼくにできることはないか知りたくてしつ問しました。そして考えました。ぼくにできることは、みなさんの話をずっとわすれないこと、手紙を書くことです。それならできます。ぼくは、みなさんが「家族や友達がいるから楽しく学習をしている。」と聞いてびっくりしました。みなさんがつらい思いをしたのに明るくがんばっているんだと思ったからです。ぼくもみなさんに負けずにがんばりたいと思いました。ぼくたちの学校にも遊びに来てください。まっています。【8月小4男子 お礼の手紙】

(2) 災害について考えよう（中学部の活動）

活動Ⅰ ～あの日を忘れないために～ 【大震災ビデオ視聴】

テレビ局が編集した大震災のビデオを視聴した。生徒は早く逃げるよう促す人々の声や大津波が家屋をなぎ倒していく大きな音に悲しみを隠せない様子であった。以下は生徒の感想である。

今日、東日本大震災のDVDを初めてじっくり見る事ができました。やはりニュースで少しずつ映像を見るよりも時間をかけて見た方がとても恐く信じがたいものでした。人が逃げる姿や波が来て町を飲み込んでいく姿もくわしく見る事ができました。次の建物を建設するときは今回津波が来たところより高い場所に建てれば良いと思います。そうすれば人の命もたくさん救えると思います。今日見た大津波の場所に僕がいることを想像できませんでした。このことをずっと忘れずにいたいと思います。【中2男子】

僕は、今日震災時の津波のDVDを見ました。家屋も車もすべて町全体が壊れていく姿を見てとてもゾクッとしました。津波なんて・・・と思っていた僕だったので、とても驚かされました。今回このDVDを見て思ったことは日頃から他の人とのコミュニケーションを大切にまた、何かあってもあわてずに行動するという事です。あわてて怪我をするよりは確実に避難出来た方がいいと僕は思います。【中3男子】

震災のビデオから、「ザー、ゴゴー、バリバリ」という聞いたことのない大きな音が流れてきました。僕は思わず、「何の音？」と先生に聞きました。先生は、「大きな波が押し寄せてきて、家がたくさん流されている音だよ」と言いました。

地震の時は、停電したり食べ物やガソリンが不足して、不便な思いをしましたが、海の近くの人はずっと大変だったんだと感じました。早くもと通りになって普通の生活ができるようになってほしいと思いました。【中1男子】

活動Ⅱ ～自分自身を守るために～ 【防災体験学習】

12月18日、岩手県立総合防災センターで体験を通して、災害時や日頃の防災についての心構えを学習した。初めに地震後の津波への警戒と人命救助のために大事な稲束を燃やした庄屋さんをテーマにした「稲むらの火」のビデオを鑑賞した。

次に消火に使われる消防車のホースを実際に見せていただき、その使い方を学んだ。今回の見学は冬だったため、実際の放水体験はできなかった。来年の夏にはぜひ放水の体験をさせたい。



【消火用ホース体験】

最後に地震体験を行った。関東大震災をシミュレーションした地震の揺れはとて大きく感じられ、初めは余裕で立っていた生徒も、だんだんと恐怖心が湧き、最後まで立っていることができなかった。改めて地震の怖さを体感することができた。以下は生徒の感想である。

今日、防災センターではたくさんのお話を学んできました。

まず、最初に見たビデオでは地震が起きて津波がくるとなったらすぐに高いところに逃げるということが大事だと分かりました。その後に水を出すホースを触りました。一卷20mで幅が65mmだと聞いて消防士の方は火災が起きると大変だということ分かりました。その次に、地震体験をしました。震度7という揺れは経験がなかなかできません。今日感じてみて震度5以上になると立っていられなくなってきて7になると体が上に上げられる感じがしました。

本当にたくさん学んだり体で実際に体験することができました。今回学んだことをいかして、これからいつ地震や災害が起きても対応ができるように心構えや準備をしていこうと思いました。【中1男子】

(3) 被災地に義援金を送ろう（中学部の活動）

進路指導週間の一環として行われた校内実習『フルーツキャップ作業』『缶収集』の収益金を義援金に役立てようと生徒が一丸となって取り組み、1,725円を日本赤十字東日本大震災義援金に送金した。



【フルーツキャップ作業】

このように中学部では、被災された方の悲しみや苦しみを共感しながら3つの活動を行い、これをとおして、第一に3.11をいつまでも忘れることなく、そして普段からの心構えが災害に遭った時に自らの命を守る最善の方法であるということ学ぶことができた。

(4) 被災地でボランティア活動しよう（高等部普通科の活動）**①被災地ボランティア活動・宿泊生活学習**

はじめに、このボランティア活動を進めるための事前調査として、どのような活動が被災地で必要とされているかをインターネットで調べた。また、宮古市や大槌町出身の生徒がいることから、宮古市の生活支援センターにボランティア活動の現状を聞いてみた。その結果、がれき処理や家屋からの泥出しの要望はほとんどなく、仮設住宅住民の生活支援がメインになっているがわかった。その情報を生徒たちに伝え、「自分たちに何ができるか、何をしたいか。」という題材で話し合った。その結果、仮設住宅を慰問する活動をしようということになり、その際に花のプレゼントも持っていこうということになった。以下に活動の様子を記す。

【事前活動①】花の寄せ植え

仮設住宅訪問の期日が夏季休業明けということで、生徒による花の栽培や管理が難しいと考え、訪問の1週間前頃に生徒が自ら花を選び、寄せ植えを行った。仮設住宅に住む方が喜んでくれることを願いつつ、花の形や色を見ることができない生徒たちには教師側で花の説明をしたり、色のバランスをアドバイスしながら行った。

【寄せ植えの様子】



【事前活動②】演奏・合唱の練習

仮設住宅で披露する箏と合唱の練習はLHRや音楽、総合的な学習の時間などを活用し、曲目は音楽科の教師が被災された方を熟慮し選曲した。曲目は以下の通りである。

「校歌」 (本校生徒のみの合唱)

「Dona nobis pacem」 ()

「さくら さくら」 (箏の演奏)

「荒城の月」 (箏の演奏と仮設住宅の皆さんとの合唱)

「forever」 (本校生徒のみの合唱)

「ふるさと」 (仮設住宅の皆さんとの合唱)



【箏演奏の練習風景】

【ボランティア活動の目的と概要】

今回の仮設住宅訪問の目的を以下の2点とした。

- ①仮設住宅での生活支援として、楽器演奏や合唱披露による慰問活動を実施する。
 - ②被災した地域の実態を見学し、その被害状況について理解を深め、復興教育を推進する。
- 次に、宮古における活動の概要を記す。

○第1日目 9月11日(火)

学校を8時40頃に出発し、途中で休憩を入れながら宮古市に向かい、11時20分頃に市内の昼食場所に到着した。昼食後、一番目の訪問先である河南仮設住宅に向かった。生徒たちは初めての演奏・合唱の披露ということでかなり緊張した様子であったが、それぞれの役割を一生懸命つとめながら活動していた。仮設住宅の方は支援員さんを含め13名集まってくださり、涙ぐみながら演奏・合奏を聴いてくださった。そして、帰りには住民の方が手作りの紙製手提げ袋を生徒職員全員にプレゼントしてくださり、生徒職員ともに感激した次第である。



【河南仮設住宅での様子】

2番目の訪問先は荷竹仮設住宅で、15名の方が集まってくくださった。ここでの演奏・合唱もうまくいき、やはり、ほとんどの方が涙ぐみながら演奏に聴き入る姿が見られ、癒しと感動を与えることができた。また、手作りストラップの贈り物を全員がいただき、感謝して仮設住宅を辞去した。



【荷竹仮設住宅での様子】

宿泊先へ向かう途中、田老の被災の様子を見学したが、生徒たちは住宅がほとんど無い状態や、建物の基礎のみの風景が続く様子を車窓から見たり、震災当時に宮古で勤務していた教師から説明を受けたりして被害のすさまじさを感じたようであった。

宿泊先では夕食後に反省会を行い、生徒たちからは「訪問できてよかった。」「もう少し大きな声で上手に歌いたかった。」など感じたことや考えたこと等の発表がなされた。職員間では、演奏・合唱終了後に参集していただいた皆さんの見送り方や花の贈呈の仕方について反省が出され、生徒全員が外でお見送りをすること、一人ひとりが花を持って贈呈することにした。こうすることにより、住民との直接的触れ合いができると考えた。

○第2日目 9月12日(水)

最初の訪問先は第二中学校グランド仮設住宅であった。自治会副会長の中島様が朝早くから集会所内を片付けてくださり、スムーズに会場の準備ができた。ここでは18名の方が集まってくださった。生徒たちは昨日の自分を省みて一生懸命大きな声を出して合唱や箏・キーボードの演奏に取り組んだ。昨日同様、住民の方には涙ぐむ人が多く見られ、癒しや励ましに繋がったと思う。最後は生徒全員が出口で参集いただいた皆さんをお見送りし、寄せ植えした花の鉢を手渡すことができた。その際住民の方から握手をされたり励ましの言葉をいただいたり、住民の方と直接触れ合うことができ、交流ができたように感じた。



【二中グランド仮設住宅での様子】

今回の最後の訪問先は愛宕公園仮設住宅であった。28名が参集して下さり、今回の訪問先の中で一番多くの方に演奏と合奏を聴いていただくことができた。ここでも演奏・合唱に涙ぐみながら耳を傾けている方が多く見られ、参集した方の心情に訴える活動になったのではないかと思います。ここでは花の寄せ植えをした鉢を集会所の前に置いて皆で楽しみたいとのことで、生徒から手渡しした後、集会所前に並べていただいた。ここでも「ありがとうね。」「またおいでね。」「頑張ってるね。」「目の不自由なあなたたちが、こんなに頑張っているのだから私達も頑張るよ。」などとねぎらいや励ましの言葉をいただいたり、握手をされたりと住民の方と触れ合うことができた。最後には住民の方がスクールバスを見送って下さり、生徒全員が達成感と感動を味わうことができた。



【愛宕仮設住宅での様子】

【事後指導】

①お礼状の作成、送付の取り組み

ボランティア活動終了後、参集いただいた仮設住宅の皆さんに感謝の意を込めて、お礼状を作成した。送付の仕方について宮古市の生活支援センターに相談したところ、訪問先に届けただけとのことで、ここでも生活支援センターにお世話になった。お礼状を寄せ書きにしたのは、仮設住宅の集会所に掲示していただき、多くの方見ていただきたかったためである。また、点字によるお礼状には墨字訳（普通文字に訳したもの）をつけてみんなに読んでいただけるようにした。



【お礼状（寄せ書き）】

②文化祭での発表の取組

10月6日(土)～10月7日(日)に本校で行われた文化祭・北山まつりでも宮古市仮設住宅訪問についてのステージ発表と掲示発表を行った。

ステージ発表ではボランティア活動の様子をパワーポイントを使ってスクリーンに映し出した。説明は生徒が行い、スライドとスライドの合間に仮設住宅で披露した箏の演奏や合唱を聴いていただいた。生徒たちはボランティア活動での体験を思い出し、その体験を聴衆に伝えようと一生懸命発表していた。この発表により、保護者や地域の方に活動の様子が伝わり、普通科の取組についての理解が深まったと感じた。

【ボランティア活動のまとめ】

生徒たちの演奏・合奏はそれぞれの仮設住宅の集会所に集まってくださった住民の様子から感動と癒しを与えることができ、生活支援に十分繋がったと思う。

また、到着式の際に生徒の代表が挨拶の中でこれからどういう支援ができるのかを考えていきたいと述べていたが、仮設住宅で生活されている方の思いを感じることができたからこそ出てきた言葉であると思う。生徒たちの心の中にこのような心情が喚起されたことが今

回のボランティア活動における最大の成果であったと考える。また、田老を見学したことは、生徒にとって沿岸地区の被害状況をより身近に感じ取ることができ、震災被害についての理解を深めることに繋がったのではないかと思う。

以上のことから、今回の高等部普通科被災地ボランティア活動・宿泊生活学習の目的は十分達成されたと考える。

また、今回貴重な体験を得ることができたのは、それぞれの仮設住宅で集まっていた方及び宮古市生活支援センタースタッフのご協力によるものである。私たちの活動を支えてくださった多くの人たちに感謝しつつ、仮設住宅で生活されている方の様々な思いを受け止め、生徒たちが感じ取った心情を大



【感謝の言葉をかけられる生徒】

切にしながら今後の復興教育を推進していかなければならないと感じた。

【生徒感想文】

以下に生徒の感想文を掲載する。これが今回の活動の成果を表していると考えます。

「今回のボランティア活動で感じたこと」【高等部1年男子】

ぼくは今回のボランティア活動を通して感じたことがある。まずは、自分でも人を喜ばせることができる、ということだ。今回の僕達の合唱、演奏を聴いてくださった人達の中には、涙をこぼしていた人もいた。また、「がんばります。」や「元気と勇気をもらいました。」と笑顔になってくれた人もいた。また、新聞やチラシでつくった手提げバッグや手作りのキーホルダーをもらった。そして、「がんばってください。」や「ありがとうございました。」等と言われ、逆に自分の方が、元気や勇気、そして感動をもらった気がした。最後に、今回の経験や感じたことを活かしてこれから他に何ができるのかを考えたい。考えるだけにとどまらずに、その考えついたことを、是非、行動に移したい。

「被災地の復興について」【高等部2年男子】

今回のボランティア活動は、四つの仮設住宅で慰問活動を行いました。(中略)

二日目、最初の訪問先は、宮古第二中仮設住宅でした。前日の反省もふまえて、笑顔で司会進行をするよう心がけました。朝早くから大勢の方々に来ていただき、こちらが元気と勇気をもらいました。最後の訪問場所は、愛宕仮設住宅でした。最後に、花を渡してお話をしたとき、「会長さん、がんばってね。」と言って下さった方がいて、被災地の方ががんばっているのだから、私もがんばろうと思いました。

初めは、自分たちに何ができるのだからと、不安をもっていた私ですが、今回の慰問活動で「自分たちにも人に感動と勇気を与えることができるのだ。」と自信を持つことができました。練習以上の力を発揮することができた慰問活動でした。

この体験をふまえて、今私たちが被災地のために何ができるのだろうかということを、考え続けていきたいです。そして、3月11日の震災を忘れずに、生きていきたいです。

(5) 被災地に義援金を送ろう【義援金活動】

高等部普通科2・3年2組(特別学級)では被災地に住む子どもたちが家や親をなくしたことを知り、そのつらさを自分のことと置き換えて考えてみた。そして自分たちにも何かできることがあるはずだと話し合い、今年度の作業学習で得た収益金を寄付することを考えた。

生徒たちは「被災地に少しでも希望を届けたい」という思いで、年間を通し野菜の栽培やメモ帳作り、天ぷら油吸い取りバック製作および販売活動に積極的に取り組んだ。特に文化祭や校内での販売では生徒たちが大きな声で被災地への募金を呼びかけていた。今回の作業学習での取り組みで得られた収益金のうち、3,500円を「いわての学び希望基金」に寄付した。

【収穫の様子】



【収穫物販売の様子】



(6) 被災地に義援金を送ろう【寄宿舎の活動】

寮祭のバザーでの収益金の一部を義援金として贈る。

第50回寮祭 平成24年7月14日（土）

毎年開催される寮祭に向けて、執行部・庶務部の話し合いの中で、今年は50回という節目であり、何か記念になるような企画等を考えていこうということで、「自分達のできること」として、寮祭の出店の収益金の一部を被災地に寄付しよう！という意見が出された。成人舎生の中には被災地出身者が数名おり、様々な境遇を経て本校に入学した生徒もいる。いろいろな方の支援を受け、やってもらう側から「今度は自分達もできることを」という熱意が伝わってくる意見交換がなされた。この意見を、5月の全体室長会で提案し、「金額にとらわれずに、少額でも自分達の気持ちを届けましょう」と賛成の声があがり、取り組むことになった。

今回の寮祭は50回目ということで、今までの歴史を振り返り、写真展や先輩である職員からのスピーチなどを企画した。また、毎年、生徒から募集して決定するテーマも「夏フェス2012 記念すべき50回の思い出」と決定し、寄宿舎生一人ひとりがアイデアを出し、寮祭にのぞんだ。話し合いの際には、作って売りたい食べ物の希望がたくさん出され、50にちなんだ詰め放題やくじ、売り上げにつながるアイデアや、「これは売れる」という希望の食べ物の試作をして、イメージを膨らませ、当日の意欲向上につなげた。舎生同志が活発な意見交換をしながら、それぞれの出店で創意工夫し、準備を進めた。宣伝については、ポスターや保護者への案内、地域への回覧に、出店の売上金を被災地に寄附することを明記し、協力を呼びかけた。

当日は、天気にも恵まれ、2時間という限られた時間の中で、出店ごとに大きな声での勧誘や、出来上がりを知らせるベルなどの工夫もあり、あつあつの食べ物を提供し、売り上げを伸ばすことができ大盛況であった。児童・生徒の希望のものを数多く販売することができ、みんなで協力して楽しく取り組むことができた。

毎年行う「寮祭」という行事を通して、10代から60代の舎生一人ひとりがアイデアを出し合い、年長者が率先して取り組む姿勢は、中・高等部生にとって、働くことやチームワーク等を勉強する良い機会だったと思う。



【出店 コーダイHOUSE】



【出店 うまくなるDo?】



【出店 おかしの家】



【出店 キッチン北山】

「自分たちは、いつもやってもらう事が多いので、わずかではあるが、自分達で活動した寮祭の売上金の一部を寄付しましょう」という年配者からの声、また、目的を持って取り組む事・様々な事への新しいチャレンジは、児童・生徒の役割を果たすという意欲にもつながり、寄宿舎生の心を動かし、記念すべき50回目の寮祭となった。

寮祭後には、出店毎に反省会を行い、「とても楽しいグループだった」という声が聞かれ、それぞれの役割を頑張った事を評価しあっていた。また、9月の全体室長会の際に、寮祭の売上金を、岩手日報社へ寄付することを話し、執行部で対応した。

4 成果と課題

(1) 成果

- ①被災地訪問による被災児童や仮設住宅住民との交流および義援金を集めて寄付する活動などにより、わずかながらではあったが被災された方への支援ができた。
- ②DVDを見たり、被災地の友だちの様子を知ったり、実際に現地へ赴くことにより、被災地の厳しい状況を直に肌で感じる事ができた。
- ③児童生徒たち自身が被災県の住民としての自覚を持ち、自ら復興支援をしようという意識が高まり、支援する態度も育成された。
- ④普段、支援されている自分たちにも支援することができるということを体感し、自信をもつことにつながった。また、今後も自分たちでできる支援をしていきたいという意欲を育むことができた。
- ⑤文化祭での発表や掲示物により、家族や地域の方に生徒の活動が認められ、復興支援に対する身近な人々の意識の広がりにつながった。
- ⑥今年度は、学校経営の重点として復興教育の推進を位置づけ取り組んできた。学校評価において、「ボランティア活動をとおして復興への意識が高まりましたか」という項目に対し、「とてもそう思う」が70%で「そう思う」が23%という結果であった。今回の復興交流推進事業をとおして、教育現場において生徒の意識が大きく変化したことを実感することができた。「視覚に障がいがあっても、自分にできることをしたい」と思う生徒の姿から、将来の岩手を担う人材の育成につながっていくものと思う。

(2) 課題

- ①生徒が今後、復興支援の意識を持ち続けることができるようにするための教育のあり方や方策の検討
- ②被災地のニーズの変化に対応した支援内容の調査、および本校生徒ができる支援内容の検討
- ③生徒が大人になっても東日本大震災という史実を正確に語り継ぐことができるようにするための方策の検討

5 まとめ

本校における復興交流推進事業の根底に共通していたのは「人を思いやる気持ち」であり、「自分たちにできること」であり、「人と人とのつながり（絆）」であった。発達段階によっては、そのこと自体を理解できなかった児童生徒もいただろう。しかし、自ら活動を行った結果が復興支援につながったとするならば、その児童生徒の活動自体にも意味があり、意義があったと言えるのではないだろうか。

本校の児童生徒が今回の事業による活動をとおしてそれぞれの年齢や発達段階に応じてとても多くのことを得たと思う。今後、沿岸被災地の状況がどのように変化していくか不透明であるが、児童生徒が得た多くのことを大切に、かつ復興支援を行っていく際の課題を児童生徒とともに考え、解決しながらこれからも復興教育を継続していきたいと考える。

「いわての復興教育」推進校 実践事例集

2013（平成25）年3月31日

発行：岩手県教育委員会事務局学校教育室

所在地：〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1

電話番号：019-651-3111

印刷：あべ印刷株式会社

〒023-0003 岩手県奥州市水沢区佐倉河字東広町60
TEL 0197-24-8303 FAX 0197-24-8330